

■第十七章 行為／カルマ〔業〕とその果実 (actions and their fruits) の考察

この章は、ブッダの教えとしての、仏教形而上学で扱われる理論としての「カルマの法則」を論じており、それが空である、つまり本質を持った実体的存在ではないということを説明している。しかし後述するが、形而上の説明を実体でないと主張することからくるパラドックスの問題を否応なく含んでいて解釈上困難な部分もあり、様々な異説を生んでもいるのである。

1. 自制 self-restraint と他者を益することを
慈悲の心をもって行うことはダルマ Dharma である
これはこの生と来世における
果実の種子である

1. 意識

(反論者は仏教の教義をそのまま持ち出して、こう主張を始めるだろう。) 自らの欲望を律して他者を益するように慈悲の心をもって行うことはブッダの教えである。それはこの世においてと来世において、そうした行いの (善き) 結果をもたらす種子となる。

この章はナーガールジュナにとっての反論者が自らの説を述べる形で始まっている。それは1. の詩から19. の詩まで続いているが、最初の三つの詩 (もしくは、カルマの分類法まで受け入れるなら五つ) は仏教の一般的道徳的教義であるカルマというものを示す形になっており、ナーガールジュナも一応受け入れるだろう。しかし6. 以降の詩では複数の反論者が独自の実体的な見解を主張して行く形になり、20. からがナーガールジュナ自身が反撃に出る内容となる。反論者の主張は当時の四つの有力な対立教派の見解を表しており、1 部分的にはナーガールジュナ自身も認めるような考え方も含まれている。したがって誰の考えを言っているのかについては、全体から眺めてよく詩の意味を考える必要がある。

1. 二人の反論者がその主張の中に批判する流派の考えを示す形で四つ数えられる。6. と、7.~10. 、11. と、12. ~19. である。

2. 比類なき賢者はこう言っていた

行為〔カルマ〕は意図 intention であるか、意図によるもの intentional（実際の行為と言葉）であるかである

これらの行為〔カルマ〕の様々なものが

色々な形で伝えられてきている

2. 意識

ブッダはこう言っていた。カルマには想念のカルマ（心的／精神的カルマ）と、言葉や実際の行動によるカルマ（物理的カルマ）の二つしかない。これら二つのカルマに属する様々な種類のものが、今日まで色々伝えられてきている。

仏教ではカルマ（業）Skt: karma, Tib: las ということが言われる。これは「行為」という言葉で表され、英語では action と訳される。ただし単に「行為」とすると本来の意味がぼやけてしまうので、ここでは「行為〔カルマ〕」としておいた。カルマというのは、人が何かの行動を行うと、かならずその結果を受け取ることになる、という考え方である。善き行いは幸福という結果をもたららし、悪い行いは不幸を招く。単純に言えばそういうことである。自己や世界への執着は輪廻という結果へと人を導き、執着を超えた境地に至れば涅槃の静寂という結果へ至る。これは誰か審判者が死に際して天国と地獄に振り分ける、というような考えではない。また、かならずしも行いに見合った幸福や罰といった結果だけでなく、欲望に従って行動したために欲深な性格がいつそう強化された、などという同質強化のようなことも含まれる。より正確には、善であれ悪であれ、そのどちらとも言えないものであれ、いかなる行いも、その（何らかの）性質に応じた次の状況を招く、というニュートラルな表現になる。ありとあらゆる種類の行為が、複雑な因果関係を経て、固定的ではないがそれにふさわしい未来のあり方を決める。それは現世でも起れば来世に持ち越されることもあり、個人の上にも集団の上にも力を及ぼす。

しかしここで、カルマを引き起こす行為は実際の行為だけとは限らないということも指摘しておかねばならない。ただ「思う」だけでも、それに相応しい結果を招いてしまうのである。「呪」えば、「怒」れば、そうした感情だけで何の行為に移らなくても、それに相応しい結果はやってくる。そして仏教では、口で言っただけのこともカルマとして結果を引き起こすと考えており、行動とは分けて表現するのである。

したがってカルマの種類としては、想念（心的／精神的）による「意図」のカルマと、実際の行為（罵りの言葉を口にするとか人殺しをするとか）による「意図的なもの（行為）」によるカルマとがあり、さらに言うならば、そのうちの実際の行為によるカルマも、想念を持った段階のカルマと、実際にそれを言動や行動に移した段階のカルマの二つのもので構成されているということになる：

3. これらのうち、「意図」intention と呼ばれるものは
心的欲求である
「意図によるもの（行為）」intentional と呼ばれるものは
身体／物理的なものと言葉によるものから成り立っている

3. 意識

これらのうち、想念による心的／精神的なもののことを「意図」と呼んでおり、実際に言葉にしたり行動に移したりする物理的な行為そのものを「意図によるもの（行為）」と呼んでいる。

4. 言葉と行為と
放棄された、および放棄されなかった行為と
決心 resolve 2 が
そして同様に. . .

2. Skt: avisnaptaya, Tib: rnam rig byed min pa. 仏教の教えに従った行為を実行するための僧侶の誓いや決意を言い表す専門用語である。Garfield p.233

5. 喜びから引き出された

高潔な行為（福）と高潔でない行為（非福）

そして同様に意図と道德性：

これら七つ（七法）3 が行為〔カルマ〕の種類である。

4. 5. 意識

言葉と実際の行動、心に浮かんだ後放棄された行動と放棄されなかった行動、（僧侶が自ら行う）行為に対する誓い、喜びから出た高潔な行動と高潔でない行動、心に浮かんだ想念と徳のあり方、これら七つがカルマの種類である。

カルマの種類分類自体はあまり重要ではない。反論者がこうした分類をここであげているのは、次からの詩で、原因となる行為それ自体が実体であるとするような考えを説明するためである。この反論者は行為が実体であるとするようなそうした考えは正しくないと言いたいのであり、行為と結果とをつなぐ何らかのリンクのようなものが実体的に存在すると考えているのである。6. の詩でそれがわかる：

6. もし（行為が結果として現れる）機が熟するまで

行為がその場に存続していなければならないのなら、それは永遠のもの（常住）でなければならないことになるだろう

もしそれが消滅してしまったのなら、消滅してしまっているものから

どうやって結果が生じるというのだろうか

3. 数が合っていないかもしれないが、数え方はあまり重視されていない。分類自体に無理があるのである。中観派の中でも異説があり、ツォンカパはこう数えた：

（1）良い言動と悪い言動；（2）良い物理的行動と悪い物理的行動；（3）放棄された行為と放棄されなかった行為；（4）称賛に値する行為；（5）称賛に値しない行為；

（6）良い行為を成そうとする意図；（7）悪い行為を成そうとする意図。Garfield

p.233

6. 意識

(行為が行われ、その行為の結果が現れるまでには何がしかの時間がかかるのであるから、行為の結果が現れるための) 機が熟するまで、行為はその場に存続していなければならないと言う者もいるであろう。しかし結果が現れるまでの間、その原因となった行為が存続し続けて結果に働きかけていなければならないのであれば、行為それ自体が永続する実体でなければならないことになってくるだろう。原因である行為自体がすでに消滅してしまったなら、そして消滅状態にあるならば、そのときどうやって結果を引き起こすことができるだろうか、というわけである。

7. 連続した心 continuum (〔心〕相続) 4 に関して言えば、ちょうど芽のようにそれは種子から現れてくる
そこから果実(果報)が生じるのである。種子が存在しないならそれが存在となって立ち現れてくることはないだろう

7. 意識

輪廻を超えて連続している意識について言えば、ちょうど芽が種子から現れてくるように、意識も(前世の意識から今生の意識が生じるという具合に、)原因から生じてくるのである。原因から、果実である意識という結果が生じる。種子である原因が存在しないなら、意識を持った(個々の)人間が存在として立ち現れてくるということはないだろう。

8. 種子から連続した心が生じ

そして連続した心から果実(果報)が生じるのであるから

種子は果実よりも前に存在しているのである

したがって非存在(断絶)ということも、永遠(常住)ということもない

4. 「連続体」とか、「心の相続」とか、「連続する意識」などと呼ばれる仏教特有の概念である。輪廻を前提として、個々の人間の意識ではなく、生死を超えて全体としてつながった意識の流れがあると考えられており、その意識の連続のことである。前世での意識が今生での意識の原因である。漢語では「(心)相続」。

8. 意識

原因である種子（としての前世での意識）から連続した心というものが生じ、そしてその連続した心の中継して、そこから結果である果実（としての今生の意識）が生じるのであるから、種子が果実よりも（時間を隔てて）前に存在していると説明できるのである。したがって、原因など何も存在していないということは言えず、かといって原因が永遠の実体だということもない。

6. の詩で示されたような説では、原因が消滅した後では結果を引き起こせないのに、「原因」が実体でなければならないことになるが、そう主張する必要はないというのである。この反論者はそうした考えをとらず、「連続した心」というものを媒介として、過去に行った行為が、その行為が消滅した後になっても結果を引き起こせることを説明できると主張している。「連続した心」というものがリンクとなって原因と結果がつながっている。だから行為を行った後、結果が現れるまでの時間がいくら隔たっていても構わないのである。

9. このように、連続した心にあっては
それよりも先に存在する意図（心）によって
結果である心の状態が生じるのである
これ（意図／心）が存在しなければ、それ（結果の心）も生じないだろう

9. 意識

このように、連続した心という考え方によれば、その連続した心が媒介となって、時間的に前に隔たって存在していた（個々の）意識のあり方が、結果である意識のあり方を生じさせていると説明できるのである。この（前世などの個々の）意識が存在しなければ、その（今生などでの個々の）意識も生じないだろう。

10. 意図（心）から連続した心が生じるのであるから
そして連続した心から果実（結果）が生じるのであるから
行為は結果に先立っているのである。
したがって非存在（断絶）ということも、永遠（常住）ということもない

10. 意識

原因となる個々の意識から「連続した心」が生じるのであり、その「連続した心」から結果となる個々の意識が生じるのであるから、行為が結果に先立っているという説明が可能になるのである。したがって、原因など何も存在していないということは言えず、かといって原因が永遠の実体だということもない。

ここまでで反論者の一人の主張が終わったことになる。それによると、輪廻を超えて始まりもなく終わりもないものとして連続している非個別的な心というものがあるからこそ、ある生での人間の意識と、その者の来世での人間としての意識とがそれぞれ「原因」と「結果」として関係し合えるのであり、カルマの法則が今生と来世との間で働くということである。したがって、その「連続した心」それ自体は実体であり、永遠に変化しないものである。

カルマの法則について実体を持ち出して説明しようとするのは、ある意味で当然とも言えるに違いない。なぜなら、仏教が説く輪廻思想は形而上の教えであり、連続した心などを実体視することも同じく形而上の仮定だからである。しかしナーガールジュナはいかなる実体視も批判するのである。それは形而上学を批判する哲学のあり方としてはまっとうな姿勢であるが、その立場からすれば、仏教の輪廻の思想それ自体を批判しないのはどうしてなのか、という疑問も出てくるに違いない。

こう言うと少し説明が必要かもしれない。形而上学というのは、感性的経験では知り得ないものや現象世界の奥にある究極的なものを探ろうとする、つまり論理的な実証の可能性を超えた神や本質などを問題にする学問である。そして前述したように、ある行為と、その後の事件とが何らかの必然性によって結び付けられるのがカルマの法則である。しかしこの考えと偶然性という考えとは、どちらが正しいということも論理的には立証できないはずである。悪いことをした後事故に遇ったとしたら、それは「因果応報」なのか「偶然」なのか。立証はできない。神経症患者は自分の責任を重く考えてよくこのような場合に因果関係を想定する――人間の思考パターンとしては非常に普遍的なものである――が、飛行機が落ちても、乗った乗客が悪いと考える人は一般的には少ないであろう。結局のところ、偶然という考えも、原因と結果の関係であるという考えも、それが定理だと言えば形而上の主張になる。

ところが、形而上の主張といっても、「論証できないことの存在」を主張する場合と

「絶対の真理の存在」を主張する場合とでは意味が違ってくるのである。「カルマの法則は存在するが実体ではない」というナーガールジュナの立場は、「論証できない世界は存在するが、それが絶対の真理だということは言葉では主張できない」である。この場合、カルマの法則は論証できないが、仮にそのように言葉で説明しているのであって、そう説明するのがふさわしいような何らかの原理を直観的に体得することは可能だということである。

次の詩からは、また別の反論者が立つ内容となっている。

11. 行為の十の清浄な道（修行法） the ten pure paths of action は
ダルマ（法）を悟る手段である

この生と別の世におけるこのダルマの報酬は

五つの喜び five pleasures （楽）である

11. 意識

（また別の反論者はこう主張し始めるだろう。彼はまず誤った見方を示してこう言うのである：）「行為の十の清浄な修行法」5（こそブッダの教えであり、永遠の真実であるような本質的なものである。それ）によってこそダルマを悟ることができる。この修行を行った結果としての報いは、五感の喜び 6 ——つまり幸福である。（それは今生にも現れ、来世に現れることもある。）

十の修行法が実体である、と直接は言っていないが、反論者は暗にそういう間違った考えを示したくてこう言っているのである。次の 12. の詩でも過ちについて具体的に分析はしていないが、彼としては自説を取り上げるきっかけになればそれでよいのである。

5. 徳のある行為についての仏教の一般的な言い方である。その内容は、殺生、盗み、姦通、嘘、ごまかし、悪口、陰口、貪欲、憎しみ、哲学的過ちを避けることである。

6. 五つの喜び（楽）というのは五感の喜びという意味であり、つまり現世における人間としての幸福のことである。正しい修行は現世利益をもたらすと言っているのである。

12. もしこのような分析が優れたものだと言うなら
 多くの過ちが出てくることになるだろう
 したがって、この分析は
 ここにおいては妥当ではないのである
13. それではここでは何が妥当なのか私が説明しよう：
 その行為に従った
 すべてのブッダたちと自己征服者（独覚）たち
 そして弟子（声聞）たちによって示された分析は．．．
14. 行為〔カルマ〕は取り下げられることのない支払い約束の覚書 *uncancelled prom-
 issory note*（不失法）⁷ のようであり
 負債のようなものである
 それが及ぶのは四つの領域 *the realms it is fourfold* ⁸（四界）である
 さらに、その性質は中立（無記）である

12. 13. 14. 意識

しかしこのような考え方を正しいとするなら、多くの矛盾が出てくることになる。したがってこういう考えは間違っているのである。それならばどう考えるべきなのか。それを今から私が論じてみせよう： その正しい修行法を成就したブッダたちや小乗の修行者たちが示した分析は、（カルマとは）決して取り下げられることのない借用書のようなものであり、いわば負債のようなものである。その効力は存在のすべての領域に及ぶものであり、さらに言うならば、そのカルマの性質は肯定的でも否定的でもなく、道徳的にニュートラルなものである、というものである。

7. *Skt. avipranasa.* 小乗仏教（経〔正〕量部）などで主張される輪廻の主体。

8. 伝統的な仏教の世界観によるものであり、欲界、形態（色）界、無形態（無色）界、解脱界（無漏界）*the realm of freedom*、である。漢訳は「四界」となるが、解脱してもカルマが及ぶというのは不思議に思えるし、一般的には最初の三つで「三界」と分類されるのが普通である。ここの部分を「界で言えば四種ある」と訳す例もある。

11. 以降の詩で主張を始めている反論者は、まず、仏教の正しい修行法こそが本質的存在であり、それを行えば現世での物質的幸福が得られる、という考え方を否定してみせている。彼の考えでは、確かに正しい行いをすれば物質的幸福が得られるということとも言えるにしても、そうした行為を正す修行それ自体が本質的実体であるわけではない。カルマの法則はいわば取り消されない負債のようなものとして理解すべきであり、抽象的な法的義務のようなものだと言うのである。

15. 捨てること abandoning (断) によっては、それは捨てられない
放棄 abandonment は瞑想 meditation (修道) によって見いだされる
したがって、失効しないもの nonexpired (不失法) によって
行為の果実が生ずるのである

15. 意識

カルマを捨てようと努力しても、そのことによってはカルマを無効にすることはできない。カルマの放棄というものは瞑想によってのみ見出せるものなのである。したがってカルマというものは失効しないものなのであり、その失効しないカルマの法則によって、特定の行為に対応する結果が（瞑想の成果という意味においても）生じるのである。

自己や世界への執着を捨てることで輪廻から解脱できるとしても、捨てるように決意しただけで、あるいは行動を制御しようとしただけでできるようなことではない。事物の性質と空性というもののあり方についての瞑想を深めることでこそ、それは可能になるのである——このように言うことは、カルマを負債の覚書にたとえることにも対応すると言えるかもしれない。負債というものは借り手が自分の意思だけで取り消そうとしても取り消せるようなものではない。借用書が残っているからである。

16. もし放棄が捨てることで成り立ち、そして
もし変形 transformation によって行為〔カルマ〕が壊されるなら
行為の根絶 destruction of action などといった
その他の過ちが生じてくることになるだろう

16. 意識

もしカルマの法則から解放されることが、行動を捨てることによってできるのであれば、そして修行者が行為〔カルマ〕のあり方を変えることでカルマが破壊できるのであれば、行動を止めるようにする（＝カルマの破壊）とかいった様々な過ちが生じてくることになるだろう。

17. 同じ性質 similar（同類）9 のものであれ、異なった性質 dissimilar（不同類）のものであれ

一つの領域内での in a realm 行為〔カルマ〕すべてによって
誕生の瞬間には
ただ一つのもの only one（不失法）が生じる

17. 意識

（どんな種類の行為〔カルマ〕であろうと、つまり原因となる行為と結果として現れる出来事とが善・悪・中立において）同じ性質を持ったものであれ、異なった性質を持ったものであれ、）輪廻の一領域（である四界のうちの一つの世界）の内部で行われた行為〔カルマ〕のすべてが合わさって、誕生の瞬間に一人の人間が（、つまりカルマの決算として一つにまとまったものが）生まれてくるのである。

人間は数限りない行為を行うが、その瞬間の人間のあり方は、それに先立つ行為（前世とは限らず、今生のうちでも）の結果として現れている。誕生においては、それ以前の行為の総決算として、その人間が生まれるのである。この最後の行で「生じ」てくるとしてしているものは、ここで訳しておいたように「一人の人間が生まれてくる」という意味に解しているガーフィールドなどの他にも、「結合の時に於いて、一つの不失法が生じる」と

9. 「善・悪・善悪どちらでもない（無記）」という性質の点で、結果に対して同じ性質を持った原因を「同類〔因〕」言う。つまり善なる結果を引き起こしたのはそれに先立つ善なる行為だという場合などである。ちなみに反対方向から、つまり原因となる行為の側から見て同じ性質の結果を表現する場合は「等類果」ともいう。原因と結果が善悪において異なっているような関係の場合は、不同類〔因〕などと言われる。

か、「さまざまのものが一つのものとなり、それがまさに行為としてその姿を表している」などと訳しているものもある。

18. この目に見える世界にあっては
二つの種類 10 のすべての行為〔カルマ〕が――
それぞれが行為と、切り離されて失効したりしないもの the unexpired separately (不失法) とで構成されているが――
機が熟するまで存続するだろう

18. 意識

目に見えるこの世界の中に存在する二種類のすべての行為〔カルマ〕は――それぞれが実際に人間が行った個々の行動（原因行動）と、その行動が結果を導くまで失効しないような固有の法則としてのカルマから成り立っているのだが――機が熟するまで（、つまり結果が現れるか、あるいは悟って輪廻を解脱するまで）存続するだろう。

カルマの法則は、何らかの特定の行動が行われた後、その行動自体が終了してしまった後も存続し、結果を導くまで消滅することがないと言っている。これはカルマの実体視であろうか。実体とは、変化するものの根底にある「永続的なもの」であり、形而上学的な「絶対の真理」と言うこととも同じであるから、ここでは永続的な絶対の真理というよりはむしろ、実体ではないが「持続的なもの」というような意味にとれる。もしカルマの法則が実体ではなく無常のものであれば、結果が現れないうちに消滅することだってありそうなのだが、輪廻を跨いでさえ失効せず、それでいて「機が熟するまで」とも言っており、次の 19. の詩では、（カルマの）「滅尽」ということを認めてもいるのであるから、この反論者は必ずしも一つのカルマ――そう数えられれば――が無条件に永続するものだ

10. 二種類のカルマが意味するのは、2. の詩に出てきた「意図」と「意図によるもの」、つまり想念のカルマと、言葉や実際の行動によるカルマの二つであるか、前の詩に出てきた、原因行為と結果の出来事とが善・悪・中立において同じ性質を持つカルマと、異なる性質を持つカルマの二つであるかの二通りの解釈ができる。いずれにしても、この詩の前半で述べられている二つのカルマとは、世の中のあらゆるカルマ、という意味である。

とは考えていないのであろう。それならば、輪廻を跨いでも消滅しないが本人が解脱すれば消滅するような性質を持った、一時貯蔵後のような個々の有限のカルマが存在する、そしてそのカルマの法則自体は永遠不変の（絶対の）真理である、ということなのであろうか。しかしその場合でも、絶対で普遍的な真理というものであれば実体である。

さて、元来カルマの法則自体が経験的に立証できないという意味で形而上学的な説明であるとは述べたが、仏教においては、たとえ中観派内部でも、あからさまに「輪廻は形而上学である」のような表現は用いない。涅槃は説明不能であるというような説明を通してそのように理解できるようにしても、むしろ反対に、「輪廻は実体ではない」のように言うのである。実体は形而上学的概念なので、実体でないと言えば形而上学ではないという具合に聞こえることがあり、「輪廻は形而上学ではない」のように理解できてしまう。実体を想定するような形而上学を一切認めないなら、カルマの法則も否定するか、あるいは実体としては否定するが、別種の形而上学として扱うと明言するかしてくれればすっきりするのであるが、その境界が曖昧なためにこの章の解釈で様々な意見の食い違いが出てきているとも言えるであろう。実際、12. から 19. の詩をナーガールジュナ自身の見解だとする英訳者 (Kalupahana, 1986) もいるのである。

この問題については、最終的には次のように考えるのが妥当だと思う： 輪廻やカルマというものは、瞑想によるある種の理解を一つの説明として言葉に置き換えたものである。その言葉自体は例え話として理解しなければならないのであり、否定するべきではないがそのままのものとして受けとめてはいけない。現象世界を生きる我々には時間を超えた世界などはイメージできないが、たとえば物理学においては高次元の数式が成立するように、過去生と来世とが本当は時間的配列によって前後しているのではないにしても、そういう風にしか言葉にできないようなものを観る次元があり、そのような多元的でありながらも相互に関わりあった世界が存在する、そう考えることもできるに違いない。もちろんナーガールジュナが中論で明白にそう説明してくれないから困るのであるが。

19. その果実（果報）は――もし（カルマの）滅尽か（当人の）死かが
起こったなら――存在することをやめる
これについては、汚れのないもの *stainless*（無漏）と
汚れたもの *stained*（有漏）との区別がある

19. 意識

(そして失効しないカルマの法則によって引き起こされた特定の行動に対する) 結果は、瞑想修行によって涅槃に至ることでカルマが消滅してしまうか、その行動を行った本人が死ぬかすれば存在しなくなる。この結果の消滅については、煩惱に汚されていない消滅(悟った結果の消滅)と、煩惱に汚されたままでの消滅(死による消滅)とがある。

ここでは失効しないものだと言われるカルマも、時間の進行の中であって消滅することがあると述べている。ここまではナーガールジュナの考えではなく、反論者の主張だととらえるのが中観派の一般的な考え方であり、ガーフィールドの解釈もそうなっている。そして次の 20. の詩からがナーガールジュナ自身の反論だと考えられている。

20. 空であって何もないのではなく nonannihilation (非全滅／非断絶) ;

輪廻存在であって永続ではない nonpermanence (非常住) ;

そのようなものである行為〔カルマ〕が失効しない (nonexpiring 不失法) という
ことが

ブッダによって説かれた

20. 意識

行為〔カルマ〕というものは依存的に存在するものであって、まったく存在しないものではなく、輪廻するものとして存在する(というように形而上学的に説明される)もので(は)あって(も)、永遠の実体ではない。そうした仕方で存在している行為〔カルマ〕が(言葉によって便宜的になされた形而上の一つの説明としては、〔あるいは本質を持ったものとしては〕)失効しないものであるということが、ブッダによって説かれたのである。

前半二行が中観独特の言い回しであり、ブッダの言葉として述べられていることから、中観派の一般的な考えとしては、この詩はブッダの説法がナーガールジュナによって取り上げられているのだとされている。さて、それではナーガールジュナはこのブッダの言葉を肯定するために取り上げたのだろうか、それとも否定したり、制限付きで解説するために取り上げたのだろうか。仏教徒であるナーガールジュナがブッダの言葉を否定すると

は考えられない。しかしここでのブッダの言葉には厄介なパラドックスが含まれているのである。

二行目の「輪廻であって永続ではない」とはどういう意味であろうか。輪廻には、死によって終わることなく輪廻し続ける、という意味と、解脱すれば終わる、という一見反対の二つの意味が含まれている。ここはまず後者の意味として、輪廻は（悟れば）終わりががあるので永続ではないという具合に理解できるだろうか。しかし「永続でない」を「実体でない」の意味に解すると、「輪廻であって実体でない」にもなる。しかしこの場合だと、輪廻も実体も形而上学的な概念であることから、「輪廻は形而上学的な概念だが実体ではない」という意味になってくる。どのような形而上学的概念なのかという内容は、18. の詩の解説で述べた通りである。

次に、三行目の「カルマは失効しない」とはどういう意味であろうか。永続しないが失効もしないのである。どういう意味で消えてなくなるのかは微妙な問題であり、このブッダの主張が何を意味しているのかはよく考える必要がある。

輪廻を跨いでも失効しないというのが、小乗仏教などで言われる「失効しない」という言葉の意味であるが、こういう主張であれば、「失効しない」は形而上学的な表現だということになる。つまり、「完全な永続ではないにしても解脱しない限りは永続する」という考えは、経験的には論証できないものだということである。するとブッダは、そのように論証できない教えを、とりあえず言葉で説明して聞かせたことになる。

しかしこの詩の三行目についての一般的な中観派の読み方は違うのである。カルマの法則は空なので、「本質を持ったものとしては」失効しない、とするのである。最初から本質を持っていないのだから、本質を持ったものとして消滅することがないのは当たり前だというわけである。ガーフィールドはこれについて、存在を止めるということはかつて実体として存在していたものがまったく存在しなくなることであり、と説明している。つまりこの解釈では、実体でない「のに」消滅しない、ではなく、実体でない「から」実体としては消滅しない、ということになる。ただし、このように「本質を持っていない」というのであれば、それは単なる言葉の説明に過ぎないということと同じになるので、基本的には前述の、「形而上の主張だが、説明としては言葉に依存した現象的なものである」という二重基準の解釈も含むことになってくるはずである。中観派がこのように「本質を持ったものとしては」という語句をここで補うようなやり方は、この後の詩との解釈とも整合が取れているのだが、いずれにしてもここでは若干苦しいところがあるのも否めないの

ではないだろうか。「カルマは本質を持たないので本質を持ったものとしては消滅しない」という表現にどんな積極的な意味があるだろうか。裏返せば「本質を持たないものとしては消滅する」とブッダはここで言いたかったのだろうか。それならば一、二行目ですでに言っていることをわざわざもう一度ひねった表現で繰り返していることになる。

ガーフィールドは、この「本質を持ったものとしては」失効しないという解釈によってこそ、「永続するものは何もないという主張と、すべての行為〔カルマ〕は消滅しないという主張との緊張関係」という、「決定的で明白なあのパラドックスを解決する」ことができる」と宣言している 11 のだが、私にはやはり同語反復のように思えてしまう。中論にはこのように、「本質としては」という語句を補うように求めてくる部分がよくあるが、それさえすれば万全だと考えるかどうかは読み手の問題であろう。ナーガールジュナが本来どうとらえていたかを問題にするのではなく、破綻なく解釈するためにそのように歴史的に洗練されてきた、という控えめな見方も許されるはずである。

また、ガーフィールドは「カルマは依存的な存在なので特定の時点で消滅したりせず、常に未来に向かって枝分かれして行く」という解釈もあると言っている 12 が、これは、依存するということは概念に依存するということなので、恣意的に（勝手に）いくらでも依存対象の概念連鎖を見つけられるということであろうか。だとすると、概念を枝分かれさせるのは我々認識主体なのであるから、因果的連鎖としてそれ以上は追わない、という恣意的な（意図的な）選択だってありそうな気がしてくる。

いずれにしても、これらの詩がナーガールジュナ自身の歪曲されていない表現であると受け止めようとするなら、彼がこの章の結論としてカルマの法則が実体でないことをこども強調するのは、空の実体視と同じように、言葉の上でのカルマの説明を実体視してそれに執着する者が多くいたので、警鐘を鳴らす必要があったのであろうと考える以外にない。カルマの連鎖の原理は一つの説明に過ぎず、修行の動機としては持つておかねばならないが、瞑想実践に臨む際にはそれさえも捨てねばならないと覚悟すべきなのであろう。

11. Garfield p.239 l.32

12. Garfield p.239 l.24

21. 行為〔カルマ〕は生じない（不生）ので
本質を持たないもの without essence（無自性）として観察されるのである
それは生じたものではないので
そのことによって失効しないもの nonexpiring（不失法）なのである

21. 意訳

行為〔カルマ〕は（本質を持った実体としては）生じないので、本質を持たないものとして観察されるのである。それは（本質を持った実体として）生じたものではないので、（本質的に）消滅してまったく存在しなくなってしまうということもないのである。そういう意味で非失効なのである。

この詩もこのままだと納得の行く説明がしづらい。したがって意訳の文においては中観派の解釈にならい、「実体としては」という語句を補っておいた。「本質を持った実体としては生じない」と解釈しなければ意味が通らないと考えるのである。しかし前の詩と同様、ここも別様の解釈ができると思う。たとえば後ろ二行は「カルマというものは形而上のものを便宜的に説明したに過ぎないものなのであって、経験的に『生じた』ような現象ではないので、現象として失効することもない」とも読めるのである。ただし、そういう理解だと前二行で「生じない『ので』本質を持たない」と訳した場合には意味がよくわからなくなる。生じるものは本質を持たない（実体でない）がゆえに生じるという原則と矛盾するわけである。しかし慣例に反してここを「経験的に生じたものではなく、『しかし』本質をもったものでもない」と訳せば筋が通ってくるので、こうした解釈も示しておきたい：

行為〔カルマ〕（の原理というものは形而上の概念であり、経験的現象として）は生じるものではないが、本質も持たないものとして観察されるのである。それは（経験的に現象として）生じたものではないので、（現象として消滅するというような言葉の説明も超えており、）そういう意味で非失効なのである。

ついでに言えば、「カルマはどういう意味でも生じないものなので」と訳すと、それは虚無的な解釈になる。そうなると、この詩はナーガールジュナの主張ではなく、虚無主義

の立場を取る反論者の主張だということになるが、虚無主義者は本質主義者の裏返しに過ぎない――つまり虚無主義者は本質を認める――と考えると、「本質を持たない」とした二行目と矛盾することになる。

さて、ここで考えられるいくつかの解釈のうちどれが正しいかという判断は、もちろんサンスクリット語原典やチベット語訳を文法や言葉の意味から丹念に調べれば特定できるという種類のものではない。「だから」とか「しかし」とかいった接続はサンスクリット語では容易に逆転できるし、写本に変更があったかどうかは今となってはわからないのである。

22. もし行為〔カルマ〕が本質を持っているなら
間違いなく、それは永遠なもの eternal（常住）であるはずだ
行為〔カルマ〕も成し得ないもの uncreated だということになる
なぜなら永遠なるものとして成し得ることなどないからである

22. 意識

もし行為〔カルマ〕が本質を持った実体なら、それは間違いなく永遠に変わらないで持続するものであるはずだ。そうすると個々の行為は成し得ないものになる。なぜなら、永遠に変化しないで持続するような行為など、誰にも行えないからである。

仏教では、人間の行う個々の具体的行動と、カルマの法則（原理）とを同じ「行為」（カルマ／アクション／業）という言葉で表すので、この詩のような言い回しが可能になるのである。このように具体的行動＝蓄積された半永続的な行動記録としてのカルマ＝カルマの法則という具合に等号で結ばれてしまうと、そこの間の飛躍が奇妙に感じられるかもしれない。しかしこうした言い回しを駆使して、カルマの法則といえども、言葉の説明の上では永遠不変の実体的真理ではないとナーガールジュナは言うのである。

23. もし行為〔カルマ〕が成しえないもの（作られないもの）であるなら
行われなかった何らかのもの、に出くわす懸念も出てくるだろう
そして自己の誓いを守らないという
間違いが生じてくるだろう

23. 意識

(永遠に変わらない行為なら、最初からそのように存在しているわけであるから、誰もそのような行為を行うことなどできない。) もしそのように行為というものがすべて成し得ないものであるなら、自分がしなかった行為の結果を引き受けることだって起こり得ると心配しなければならないのではないか。そうすると、自分が何を行うと誓おうが意味がないわけであり、誓いなど守らなくてよい、という間違っただけの考えも生じてくるだろう。

さらに言うならば、行為が成し得ないならば、道徳的な行為を心がけずと誓うこともできないだろう。

24. それならば日常の現象的なもの conventions (世俗諦) はすべて
間違いなく矛盾したものとなるはずだ
徳と邪悪の間の区別を
説明することは不可能になるだろう

24. 意識

そうすると現象世界で起きることはすべて意味のないものとなってしまう、善なる行動も悪の行動も区別として成り立たず、善悪の説明すら不可能となってしまうだろう。

25. 熟したものは何であれ熟するだろうし
時はそして、再度時を刻むだろう
もし本質というものが存在するならば、このようなことが起きるはずである
なぜなら行為〔カルマ〕が同じ場所に残るからである

25. 意識

熟したものは何度も熟し続けているだろうし、時は永遠に同じ時を刻んでいることだろう。もし不変の本質というものが存在するならば、こうしたことが起きるはずである。本質を持った行為〔カルマ〕がその場に永遠に存在し続けるからである。

26. この行為〔カルマ〕はその本質として煩悩 affliction をともなうのに
その煩悩は、それ自体で実在 real in itself しているのではない
もし煩悩がそれ自体で実在していないのなら
どうして行為〔カルマ〕がそれ自体で実在し得ようか

26. 意識

（あなたがたは）カルマが煩悩（欲望と執着に苦しめられている状態）という本質を持っていると言うが、その煩悩はそれ自体の本質を持って存在しているわけではないのである。（煩悩が本質を持った実体なら、永遠に続いて解放されることがないだろう。）もし煩悩がそれ自体の本質を持って存在していないなら、どうしてカルマの法則がそれ自体の本質を持って存在することができるだろうか。

27. 行為〔カルマ〕と煩悩は

肉体を生じさせる原因（縁）だと教えられている

もし行為〔カルマ〕と煩悩が

空であるなら、肉体のことについて何が言えるというのだろうか

27. 意識

（しかし反論者するあなたがたはこう言うに違いない。）カルマと煩悩とが肉体を生まれさせる原因だと経典は教えているのではないか。もしカルマと煩悩とが空であるなら、どうしてそこから肉体が生まれるなどと言うことができるだろうか。

仏教では、自己と外部対象に固執して欲望にとりつかれている煩悩の状態と、今までに行った行為がカルマの法則によって蓄積された性質とによって、生まれ変わりの際に肉体を生じてくると説明しているのである。

28. 無知 ignorance（無明）に妨げられ

また、渴望／欲求 passion（渴愛／愛）に圧倒された享受者 experiencer は

行為の主体 agent と別のものではなく

同じものでもない

28. 意識

無知と欲望にとらわれたため、それに見合った結果を享受する者は、その行為を行った主体と（実体として）まったく別のものなどではなく、また（実体的に）同一のものでもない。

ナーガールジュナの回答である。渴望／欲求（渴愛／愛）は英訳では *passion* だったり *craving* だったりするが、こうした分類は第二十六章で詳しく触れる。

ここでも「実体として」という語句を補って読むのが中観派の解釈である。しかし例によって、形而上学的な解釈も可能である：

無知と欲望にとらわれたため、それに見合った（カルマの）結果を享受する者は、その行為を行った主体と別のものなどではなく、また同一のものでもない。（カルマの法則というものは形而上の説明であり、経験的に存在する現象界の法則ではないのである。したがって仮に言葉では説明されているにせよ、現象界を構成する言葉の認識原理である同一性の原理を超えたものであり、同一であるとか別であるとか論じるにふさわしくないのである。）

29. この行為〔カルマ〕は

原因（縁）から生じたのではないのであり

原因なく（非縁から）生じたものでもないので

行為の主体 *agent* というものも存在しないということになる

29. 意識

こうしたカルマというものは、（本質的に存在するような）原因から生じたのではないのであり、（本質的に）原因がない、つまりまったく何もないところから生じたのもないので、（本質的に存在するような）カルマの主体というものも存在しないのである。

ナーガールジュナの見解。この詩でも「本質的に（実体として）」という語句を補うのが中観派の正統的な読み方である。それとは別の形而上学的な解釈は以下の通りである：

こうしたカルマというものは、（実体でもないが、経験的に立証される現象界の内部にあるのでもない、形而上の説明なのであるから、因果関係という現象界の認識原理を超えており、）原因から生じたのではないのであり、（かといって、それを説明する段では言葉に頼って説明されるわけであるから、）原因（を立てるという因果関係の原理に関係）なく生じたとも言えないのであり、カルマの主体というものも存在（するとか）しない（とか言えない）のである。

30. もし行為〔カルマ〕も行為主体も存在しないなら

行為〔カルマ〕の結果 fruit（果報）などというものがどうして存在し得ようか
結果なくして

どこに享受者 experiencer が存在し得るだろうか

30. 意識

（これに対して反論者はこう言うだろう。）もしカルマも、それを行った主体も（実体としてまったく）存在しないなら、カルマの結果などというものがどうして存在できるだろうか。そのように結果がまったく存在しないのに、どこにカルマの結果を享受する者が存在できるというのだろうか。

31. ちょうど師が、魔術によって

魔術的な幻覚（の人物）を作り出すように、そして

その幻覚（の人物）によって

また別の幻覚が作り出されるように

32. 行為主体とその者が行う行為〔カルマ〕もそれと同じである：

主体は幻覚のようなものである

その行為〔カルマ〕は

幻覚の幻覚のようなものである

31. 32. 意識

ちょうど師が魔術によって幻覚の人物を生み出すように、そしてその幻覚の人物がさら

に別の幻覚を作り出すのと同じように、行為の主体と、その者が行う行為〔カルマ〕も説明できるのである： 行為の主体というものは幻覚のようなものである。そしてその行為〔カルマ〕は、幻覚によって作られた幻覚のようなものである。

幻覚のようである、と言っていることの内容は、中観派の解釈では「実体ではない」ということである。依存的に、言葉に頼ってのみ説明できるようなものなのである。したがって、カルマの法則といえども例外ではない。言葉による説明に過ぎないという部分が強調されることになる。

これに対して形而上学的な解釈では別のものになる。幻覚のようだと言っていることの意味は、カルマの法則は形而上の概念なのであって、瞑想によってそのように直観できる世界はあるが、言葉で完全に説明できるものではないという意味である。経験と言言葉によって論証できるような現象界の概念でもなく、かといって言葉に頼らずには例え話としても説明できない：

カルマの主体とその者が行う行為〔カルマ〕もそれと同じである： 主体は幻覚のようなものである。（言葉によって形而上学的に説明された失効しないカルマの担い手というものは、実体でもなく、経験的に実証できる現象でもないからである。）そのような者の行う行為〔カルマ〕は幻覚の幻覚のようなものである。

33. 煩悩、行為〔カルマ〕、肉体、
そして主体も果実（果報）も
ガンダルヴァ（乾闥婆）の都市のようなものであり
蜃気楼か夢のようなものである

33. 意識

煩悩もカルマも、それによって生まれてくる肉体も、また行為の主体も、そのカルマの結果も、ガンダルヴァの空中樓閣のようなものであり、蜃気楼か夢のようなものである。

空性ということが、実体的観点からすると蜃気楼か夢のようなものなのである。しかし現象界のリアリティとはそのようなものであり、現象的存在をそういう形で肯定するのが

正しい理解なのである。何も存在しないわけではなく、現実に存在している。しかし蜃気楼の水が喉を潤せないように、現象界に存在する「私」も、私の欲する対象物も、それへの執着が我々を救うことはできない。これが正統的な理解である。

形而上学的な解釈を付け加えれば以下の通りである： 煩悩もカルマも肉体も行為の結果も、すべて言葉を越えた直観を言葉で表してみた例え話のようなものであるという意味で、蜃気楼か夢のようなものなのである。カルマの法則を絶対の真実だと信じる者には悟りは訪れない。